

論文で、この章を読むだけで今日の世界の多文化教育の動向と問題点を端的に理解することができる。20世紀後半以降における移民・少数民族の活発化と、そのグローバル・ネットワークの発展は、今日、民族的・文化的同質性をベースとする政治的共同体としての国民国家形成の枠組みを大きく揺るがせる力となりつつある。日本の学校でも近年、外国人の増加が、これまでの国民教育の理念的枠組みでは対応しきれない問題をたくさん生み出している。第Ⅰ部の諸論考から得られる知識や観点は、そうした日本の諸問題を考える上で大変有用であると思われる。その点ではむしろ、多文化教育の中心的な課題の一つである多言語教育や宗教教育の視点から、日本の教育制度・実践上の問題点を具体的事例分析を通して指摘した第Ⅱ部4～6章の諸論文が非常に印象に残った。

■ 書 評 ■

亀山佳明・麻生武・矢野智司 [編]

『野性の教育をめざして—子どもの社会化から超社会化へ—』

南山大学 加藤 隆雄

かつてウィリスの『ハマータウンの野郎ども』やコンネル『ジェンダーと権力』で、社会化の概念が保守的で「機能主義」的な過去の遺物のように扱われるのを見て、軽いショックを覚えたことがある。それに比べて日本の、特に教育社会学の文献における「社会化」は、いろいろいわれながらもそれなりの地位を保っている、というところではないだろ

評者は15年ほど前、小林哲也氏との共編著として『多文化教育の比較研究』（1985）を刊行したが、この本は同種の比較研究が他になかったためか、幸い幾度か版を重ねることになった。しかし、重版を出すたびに、新しい資料による全面改訂の必要を痛感しながら、その任務を果たせないまま今日にいたっていることを慚愧に耐えなく感じていた。今回、本書を手にして、多文化教育に関わる近年の変化に感慨を覚えると同時に、“老化した”拙編著を補って余りある本格的な比較研究の成果の刊行をたいへん喜んでいる。本書は、多文化教育研究に関心をもつ読者だけでなく、日本の公教育がどう変わるべきかを模索しているすべての読者の期待に応える内容をもっていると思う。広く本書を薦めたい。

◆A5判 348頁 本体6,700円
玉川大学出版部 2000年2月刊

うか。欧米と日本で社会化概念の認識ギャップが存在するのかとギデンズ『社会学』他を繙いたら、基本的概念として位置づけられていて少し安心した反面、随分教科書的概念になってしまったなあと複雑な気分になった。私が大学院生の頃は、社会化論ブームは過ぎていたものの、まだまだ可能性のある概念に思えたものだったが……。

亀山・麻生・矢野編『野性の教育をめざして』は、社会化論の修正と「超社会化」論への改変をテーマとした論文集である。序及び「社会化と超社会化」「超社会化論による発見」「社会化論の修正」の三部で構成されている。執筆者は、京都・大阪を中心とした社会学・教育学研究者であり、8年の活動歴をもつ「社会化論研究会」のメンバーなのだそう。本書はだから研究会の成果集としての性格をもつだろうし、社会化論にどのような可能性があるのかを示す論集として興味をもたれる。ただし、11名の執筆者のモチーフは、世俗外個人と教育、遊び、ノスタルジー、幼年期、母性、人形の心、子どもの労働観、ライフヒストリー、エスノメソドロロジーなど多岐にわたり、狭義の「社会化論」には収まらない。とはいえ、自己・自我論や幼児・子ども論、文化社会学やベイトソン理論というように部分的に共通点を持ち、いわば「家族的類似」を保っている。残念ながら「序」を含む12本の論文すべてに論及はできない。個人的には細辻論文「嗜癖としての『自分探し』」に関心をもったが、以下はコンセプトの中核となる亀山論文をもとに、本書の企てについて検討したい。「…の再検討」「…の脱構築」や「超…」「脱…」「ポスト…」には「またか」とうんざりの読者も多いと思うので……。

いまさというまでもないが、社会化は教育社会学の出発点の一つである。意図的・無意図的教育行為の場合はもちろん、社会が個人に及ぼすある種の作用の原理は「社会化」として捉えることがで

きるからだ。本書でも「教育をめぐるさまざまな問題を論ずるに際して、われわれは教育を支える基本的な観念こそ考察される必要があると考えてきた。そのために、…『社会化』という基本概念にまで立ち返ってみなければならなかった。…社会化の概念にこそ教育問題を生起させる根源があるのではないか」(序、12頁)と述べられる。しかし、デュルケムに由来するとされるこの概念は、「人間科学が自明なものとしてきた」がために、現代の教育問題に対応できなくなっており修正が必要である。しかし実は、社会化概念はもっと深刻な矛盾を有する。そもそも近代社会は二律背反を内蔵しており、社会化概念もまたそれを分有していたのだった。近年、ブルセラや援助交際の問題で議論された「自己決定」ひいては自律の権利と、教育や社会化における規律とが背反関係にあるという矛盾、いわば〈自律をめざす規律〉あるいは〈規律にもとづいた自律〉のパラドックスである。亀山論文「社会化論を超えて」は、矛盾を止揚する社会化概念の再構築を企てる。手掛かりは、ベルグソンとベイトソンというなぜか名前の似た二人の理論である。ベイトソンは、亀山氏にとって自家薬籠中にあるだろう理論家だが、本論の中心的役割はベルグソンにあり、ベルグソンの超越によってデュルケムの二律背反を乗り越える筋道が示される。閉鎖系＝構造は必然的に矛盾・アポリアを生み出すため、開放系への転換が必要であり、この上に「開いた社会」における「野性の」「超社会化(trans-socialization)」(後述)が要請され

る。けれども、序で述べられた教育問題との関連もそれへの処方箋も具体的に論じられるわけではない。そのイメージさえも少なくとも評者には思い描くことはできなかった、というおざなりな批判はできる。しかし、教育社会学という実証的（最近では政策的・臨床的というべきか）風土において、手垢がついたまま教科書的に祭り上げられなおざりにされてきた社会化概念を、祭壇から引き下ろして理論的検討を加えようとする雄図には敬意を表すべきだと思う。それは他の著者の論文に関してもいえる。

とはいうものの、私はここで示される議論について否定的な考えをもつ。社会化論の脱社会化論への変換は、作田啓一、青井和男、柴野昌山をはじめとする論者によって試みられてきたし、かつて私自身もそうした構想をもったことがある。だが、閉鎖系→開放系あるいは社会化→超（脱）社会化という論理それ自体が二つの意味できわめてスタティックなものなのではないかと思うのだ。二項対立は、一方が他方の否定であるがゆえに、両者に必然的に共犯関係が生じる。他項を否定しても、否定したはずの項によって寄生されることになる。超社会化も社会化の一変種に引きずり下ろされる契機をもってしてしまうのだ（なぜ超「社会化」でなくてはならないのか？）。ついでだが、題名の「野性の教育」（最近「野生児」を「野性児」と表記した著作を見たが、本書は「野性」である。「野生」ならレヴィ＝ストロースが想起されるが、ルソーの「自然」を想定した言葉

だという）にしても、近代社会の反対物という意味でひどく「モダン」のにおいがする。第二に、ベルグソンに至る論理上でのデュルケム批判は、デュルケムを超歴史的理論体系と捉えたうえでなされているのではないか。近代社会のパラドックス自体、デュルケム理論の構成要素なのであり、第三共和政期の諸力（国家装置、技術発展、諸身分集団……）の錯綜としてデュルケム社会化論が読まれるなら、超社会化論がすぐに成立するとは思えないのである。

超社会化論について、ベルグソンに拠りながら「意志の天才たちは生命の根源から汲み取った愛によって多数の人びとをひきつけるので、そこには成員を限定する境界は存在しない。『招き』を感じた人びとすべてを含む愛の結合があるからである」(35頁)、「開いた社会において意志の天才の呼びかけに応じて、開いた社会の一員となることを、ここでは『超社会化』と呼ぶことにしたい」(41頁)と述べられる。ほとんどの読者はこうした文章を目にして引いてしまうのではないかと思う。しかし、私が密かに新たな社会理論の手引きと見なすドゥルーズ&ガタリ『アンチ・オイディプス』などにおいて、ベルグソンの思想は重要な構成要素なのであった。（先輩研究者に対して失礼至極なのだが）亀山氏のベルグソンへの注目は、かなり気になるところなのである。

◆四六版 296頁 本体2,800円
新曜社 2000年3月刊